

# 芥川龍之介 地獄変

今江祥智・ぱるちざん

2008年  
7月12日(土) 16時開演  
7月13日(日) 13時開演  
一心寺シアター倶楽

朗読劇団  
朗読 GEN 第6回定期公演



朗読 GEN に入って  
一緒に朗読を  
学びませんか!

全くの初心者も、少し習ったので  
もう少し深めてみたいと思っておら  
れる方も、ぜひ一度見学に来てく  
ださい。きっと楽しさがわかります。  
朗読劇の舞台に立ちたい方も、ス  
タッフとして活躍して下さる方も歓  
迎します。

お問い合わせは・・・  
秋山 (TEL&FAX 0742-48-8688)  
または  
辻本 (yumi-sab@view.ocn.ne.jp)

■お問い合わせ、チケットのご予約は

FAX : FAX専用06-6691-0569 (清水)

ホームページ : 朗読GEN <http://book.geocities.jp/roudokugekidangen/2008/>

メール : roudokugen@yahoo.co.jp 電話 : 0742-48-8688 (秋山)まで

## 2008年度 次回公演のお知らせ

10月13日(祝) 17:00開演  
平岩弓枝「鬼盜夜ばなし」ほか  
前売券 1,500円・当日券 1,800円

シアトリカル 應典院  
大阪市天王寺区下寺町1-1-27 TEL.06-6771-7641  
・地下鉄谷町線「谷町九丁目」3番出口、平日前通りを松原町  
筋まで歩き、交差点を左折  
・地下鉄堺筋線、近鉄奈良線「日本橋」8番出口、平日前通りを  
松原町筋まで歩き、交差点を右折

12月13日(日) 14:00開演  
中宮サロン第14回例会  
浅田次郎「佳人」ほか  
チケット / 500円  
枚方市サンプラザ生涯学習市民センター・視聴覚室  
サンプラザ3号館5階 TEL.072-846-5557  
・京阪枚方駅、東口改札口を出て右へ徒歩2分  
お問い合わせ・ご予約  
中宮サロン藤津 / TEL&FAX.072-840-3435

## 六年目を 迎えて

本日はご来場頂きまして、誠にありがとうございます。  
はじめにご覧頂く『地獄変』は、朗読GENの朗読劇の集大成と考  
えております。朗読劇は、文学をほぼ原作通りに舞台化する点におい  
て、演劇とは違うものですが、しかし、ただ本を持って読むだけでな  
く、見てもおもしろい舞台にならないだろうかとの5年間試行錯誤  
してまいりました。

私の尊敬する白石加代子氏の演じる「百物語」の演出家、鴨下信一  
氏は「全部条件を捨てていったのに演劇は残るんだね。こんな最小限  
度の演劇ってないんですよ。で、それが最もシアトリカルでドラマテ  
イックなアートになっている」と述べておられます。

9人で演じるのは白石氏のように1人で演じるのと違い、役が見え  
やすく、見た目にわかりやすい反面、語り口の違いもあり、余程解釈  
をそろえて演出していかないと、全体としての統一感が失せるという  
恐ろしさがあります。しかもGENのメンバーは名うての強者揃い、すぐ  
に「ばるちざん」の百姓衆のように「また、いつのまにかふだんの調  
子に戻ってしまい、役者衆の噂話でもするようにさえずり始めた」と  
なり、演出は悪戦苦闘しております。

しかし、その一人一人の個性の強さが「ばるちざん」ではうまく生  
かされたのではないかと……大阪弁にくるまれて、笑いの中に人間  
心理の怖さがじわっとにじみ出てくるこの作品を是非取り上げたいと  
思っておりますので、念願かなってうれしく、皆様はどう受け止め  
て下さるかドキドキしています。

『地獄変』、『ばるちざん』、どちらも朗読GENのこれからの新た  
なるスタートを示す作品として皆様の心に残りますように、一同今年  
も全力で取り組んでおります。  
どうか、今後ともご支援の程よろしくお願い申し上げます。

演出・秋山 多佳

## キャスト

### 地獄変

良秀	清水	光恵
大殿・良秀弟子	田中	章恵
宮廷女房	垣内	浩子
	辻本	由美
従者	太田	淑子
	山岡	くみ子
	木村	幸子
良秀弟子・娘	秋山	多佳
良秀弟子・若殿	福嶋	左知子

### ばるちざん

百姓	秋山	多佳
	山村	幸子
	福嶋	左知子
探蔵	山岡	くみ子
野伏達	垣内	浩子
	太田	淑光
	清水	光恵
そうべえ	田中	章恵
藤四郎	辻本	由美

### スタッフ

構成・演出 / 秋山 多佳 衣裳 / 青柳 秀子  
 照明 / 加藤 直子 制作 / 丹原 祐子  
 音響 / 西角 秀紀 宣伝デザイン / 桂 瑞子  
 舞台監督 / 佐野 泰広 記録 / 小島 知光  
 ヘアメイク / 森安 貴子  
 協力 / うらきみこ・田中 仁美・久米 裕喜代  
 家石 貞子・亀井 恵子・岡田 真理子  
 百合崎 ぼたる・堀川 希絵・宮脇 ゆき

# 【地獄変】

## あらすじ

当りきつての絵師、良秀は高慢不遜、絵を描くためなら、往來の死骸の前に腰を下ろして、腐れかかった顔や、手足を写すということもやつてのける人間である。

しかし、美しい一人娘については、金を惜しまず着飾らせ溺愛する一面もあった。

時の権力者、堀川の大殿から地獄変の屏風を描くようにと仰せつかった良秀は、弟子達を凄惨な目に合わせてまでも、絵を描くことに夢中になる。

が、半年後、良秀は大殿に「檜榔毛の車に乗ったあてやかな上臈が火に焼かれる姿を見たい」と願い出る。それを見なければ屏風の絵を仕上げることができないと言う良秀に、大殿ははじかれたように笑いながら、その願いを聞き届けるのである。

それから二、三日後の夜、洛外の雪解の御所に良秀をお召しに



指摘されている。しかし後期には現代小説が多くなり、「蜜柑」「トロロコ」「舞踏会」など珠玉の名品というにふさわしい作品がある。

わずか10年という短い作家生活の最後、まだ30代半ばにその老境は訪れる。

健康がすぐれず、病的な神経が時代的不安をひと倍強く感じたこと、義兄の自殺など身辺に不幸な事件が続いて起こったこと、そうした内外の煩わしい問題が、芥川に精神的老齢を引き起こし己を直接語りたいた気持ちは起こさせ、最後には本人を死に追

なった大殿は、牛車に火を放つのである。火柱となって燃え上がる牛車。そしてその中には……

## 芥川の文学

緻密で知的な構成と均整のとれた文体によって、人生・人間の醜さを鋭く描き、また独自の芸術至上主義を貫き、「新思潮」派を代表する作家として活躍した。私小説による実生活の告白という自然主義的リアリズム隆盛の文壇に、純然たる虚構の小説を打ち出し、慧星のごとく登場するが、それはその文学が際だって都会的、書齋的であったがためである。

それまでの作家の作品とはまるで異なった地盤から生み出されており、感覚も趣味も、洗練された華麗なものであり、題材は古今東西の書籍の渉猟から得られ、主題の設定の仕方とも理知的である。

初期の歴史小説は、仏典、漢籍、今昔物語、宇治拾遺物語、古今著聞集、謡曲、源平盛衰記、平家物語などに題材を得ているものが多い。

また日本の古典のみならず、多くの西欧の作家の作品からヒントを得たとも

い込んだのであろう。「河童」「玄鶴山房」などには人間社会への絶望と呪詛が示され、深刻なニヒリズムが漂っている。昭和2年7月24日睡眠薬を致死量飲み、亡くなった。遺書の一つ「或旧友へ送る手記」に動機を「ほんやりした不安」と記している。

### 【参考図書】

- ・ちくま日本文学全集
- ・地獄変・偷盜
- ・羅生門他
- ・芥川龍之介へ人と作品
- ・芥川龍之介 年表・作家読本
- 筑摩書房
- 新潮文庫
- 旺文社文庫
- 清水書院
- 河出書房

## 芥川龍之介・年表

年号	西暦	年齢	事項	
明治 25	1892	0	東京市京橋区(現中央区)に生まれる。異名同月同日の出生で、龍之介と命名。実母新藤ふくが精神障害。母の実家芥川家で育てられる。芥川家は、代々江戸城のお勘屋屋敷主をつとめた家柄である。家庭生活には江戸の文人的、通人的趣みが強かった。	
	35	1902	10	四月、同級生たちと同院雑誌「日の出界」を発行。11月28日実母ふく病死。
	38	1905	13	東京府立第三中学校に入学。内外の文芸書・歴史書を濫読。
	43	1910	18	第一高等学校に入学。
大正 2	1913	21	東京帝国大学英文科に入学。	
	3	1914	22	処女小説「老年」
	4	1915	23	『ひょっとこ』『羅生門』漱石門下の「木曜会」に出席。
	5	1916	24	第四次「新思潮」創刊号に、『鼻』を発表。漱石が激賞する。『孤性地獄』『活虫』『芋粥』『手巾』『瘦草と蕪蕪』海軍機関学校の嘱託教官となる。師、漱石没。
	6	1917	25	『偷盜』『戒る日の大石内蔵助』『戯作三昧』
	7	1918	26	塚本文子と結婚。『地獄変』『鏡子の糸』『開化の殺人』『華教人の死』『枯野抄』
	8	1919	27	大正毎日新聞社嘱託社員となる。出勤はせず、毎日新聞のみに年何回か小説を書くという条件。
	9	1920	28	『舞踏会』『秋』『南京の基督』『杜子春』
	10	1921	29	『山崎』『秋山園』大正毎日新聞の海外視察員として中国に赴く。帰国後『上海遊記』
	11	1922	30	『飯の中』『將軍』『トロロコ』神経衰弱、羅カタル、ピンチなどに悩まされる。
	12	1923	31	春、湯河原で静養。『保古の手帳から』『あはははば』
	13	1924	32	『一輪の土』『圣女覚え書』
	14	1925	33	『大寺寺信輔の半生』
	15	1926	34	神経衰弱が昂じて不眠症になり、一月湯河原で静養。『点鬼簿』『羅生門』
昭和 2	1927	35	『玄鶴山房』『河童』東京田端の自宅で自殺。遺稿として『歯車』『或旧友の一生』『西方の人』『鏡西方の人』などある。	

# 【地獄変】解説



正宗白鳥は昭和二年「中央公論」に下記のような文章を載せている。

この作品は「宇治拾遺物語」巻二の絵師良秀の話と「古今著聞集」巻十一の絵師弘高の話をついにまとめた作品である。素材を古典からとっているが、主題や構想は芥川の独創で芸術と道徳の相克と矛盾を問題にした王朝物の代表作である。

この種のものには他に「偷盗」「藪の中」「六の宮の姫君」などがある。大正7年大阪毎日新聞に発表したのが初出である。

「宇治拾遺」には「絵師良秀が、自分の家の焼けるのを見ながら、今までわからなかった火焰の描き方を会得したと不敵な笑みを浮かべていた。その後彼の描く不動尊の光背の火焰はよじれるように描かれ人よんで「よじり不動」とよんで歎賞した、というにとどまっている。『著聞集』の「弘高の地獄変の屏風を書ける次第」も極めて短いもので、弘高という絵師が地獄変の屏風を描いた時、鬼が楼の上から鉾をさしおろして人を制した図柄が入神の出来映えであった。描き終えて彼はまもなく死んだというのである。

私が読んだ範囲内では、この一編を以て芥川龍之介の最高傑作として推讃するに躊躇しない。明治以来の日本文学史に於いても、特異の光彩を放っている名作である。氏の多くの切支丹物や、平安朝物は智慧の遊びに過ぎないところがあつて、一度は着想と奇才に感嘆しても、二度三度と繰り返し読むと興味索然たることもあるが、「地獄変」は今度読み返して一層深い感銘を得た。芥川龍之介の持つて生まれた才能と、十数年間の修養とがこの一編に結集されている。聡明なる才人の遊びではない。心熱が燃えている。……と述べている。まさに激賞である。

39年前、1969年、東宝で豊田四郎監督。主演中村錦之介、仲代達也、内藤洋子で映画化されている。4年後の大正11年に書かれた「藪の中」は近年、野村萬斎によって実験的な舞台として取り上げられた。

## 芥川龍之介と菊池寛

一高で同級だった二人は全く正反対の性格で、芥川は都会的で洗練された秀才、一方菊池は質しい野党的秀才だった。菊池は芥川の自叙について「彼の死因は彼の肉体及び精神を壊した神経衰弱に半ば以上を解せしめることができるだろうが、その半分近きものは、彼が人生があまりに良心的であり、あまりに神経過敏であったためであるように思われる」と書いている。

## 【ぼるちんぼん】

和泉国、紺庄村は、谷沿いの小さな村。そこに住む百姓たちは、村を襲う折羽探藏たち野伏のことも金く



後に教授となり81年辞任する。88年山本有三記念路傍の石賞受賞。シャンソンを愛し、好きな落語家は桂枝雀。今日に至るまで、児童文学作家として、評論や公演活動でも活躍している。

それを知った探藏は怒りにふるえ、紺庄村に配下の者をひきつれ押し寄せた。ところが野伏がさんざん暴れた後も、百姓たちは相変わらず何事もなかったかのように畑を耕している。我慢ならない探藏は、再度、勝負を挑みにくると果たし状を書きつけ去っていった。

しかし、字の読めない百姓たちは知らん顔。さて、この結末や、いかに……

## 今江祥智 昭和7(1932)生まれ

大阪市南区に生まれる。幼稚園で「キンダーブック」に出会い、小学校では父の買ってくる絵本に読みふける。1945年大阪大空襲で焼け出され、和歌山で終戦を迎える。同志社大、英文科を卒業後名古屋桜丘中学に勤め、童話の創作を始める。60年上京。福音館書店に勤務。リーダーズダイジェスト社、理論社の編集を経て、文筆生活に入る。66年「海の日曜日」によりサンケイ児童出版文化賞を受賞。68年京都に移住、聖母女学院短大講師、

## 作品について

現代児童文学の起点とされる1960年に「山の向こうは青い海だった」を出版しながら、同時代の作家と比べ、評価の遅れた作家と言われている。日本の児童文学の体質の生真面目さが、今江作品の楽しいおしゃべり文体や、ユーモアセンスをきちんと受け止めようとしたのかもしれない。最初に勤めた中学の図書館係に任ぜられ、「星の王子様」始め児童文学の名作と出合ったことから、児童文学の魅力に開眼。その後上京、「ディズニーマーの国」誌の編集長となり、手塚治、北杜夫、三浦哲郎などと交際するが64年廃刊。70年代の「優しさごっこ」「冬の光」などの長編は児童文学の枠を越えて読まれるようになり、特に「優しさごっこ」はNHKで80年ドラマ化され、よく売れた。

この時期、灰谷健次郎、佐野洋子などが大人向け作品に移行してゆく現象があり、それとは別に、よしもとばななや角田光代のような最初から少年文学風を書く作家を生む一因を成した。